

平成24年度愛知県立芸術大学学外評価会議

平成24年11月28日（水）

【岡本学務部長】 それでは、時間が参りましたので、平成24年度愛知県立芸術大学学外評価会議を開催いたします。

まず、開会に当たりまして、本学学長の磯見学長から一言ご挨拶をお願いします。

【磯見学長】 本日は、委員の先生方に、お忙しい中、また、遠路お越しいただきましてありがとうございます。

大学には、ご存じのように、いろいろな評価がありまして、特に公立大学は、まず大学として認証評価を受けます。それから、法人が県からの評価を受けるんですけども、いずれの大学評価も、大学の機構とかシステムというようなことがどういうふうに機能しているかということの内容がほとんどでして、教育、研究の内容的な評価、大学が現在社会の中でどういう研究をし、また、どういう学生を輩出しているかというようなこと、その内容について深く評価を受けるという機会がまずないわけであります。

今回、大学として、我々は大学を運営しているわけですけども、この大学が客観的に見てどの程度のものなのか、あるいはどういう評価を外部からの目で見たとときに受けられるのかということが、どうしても自分たちの大学ですから、それを公正に見ているかどうか自信がありませんので、今日は先生方に忌憚のない意見をお聞かせいただいて、この大学がどの辺の位置にあるのかということ、それをもとにしてこれからの大学の運営に生かしていきたいと思っておりますので、今日はぜひご意見をたくさんお聞かせ願いたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

【岡本学務部長】 ありがとうございます。

それでは、続きまして、ご出席いただきました委員の先生方のご紹介をいたします。あいうえお順で、席をこちらからお並びいただきました。北川フラム様です。

【北川委員】 北川です。どうぞよろしく申し上げます。

【岡本学務部長】 北爪道夫様です。

【北爪委員】 よろしく申し上げます。

【岡本学務部長】 馬場駿吉様です。

【馬場委員】 馬場でございます。どうぞよろしく願いいたします。

【岡本学務部長】 吉田俊英様です。

【吉田委員】 よろしくお願いいたします。

【岡本学務部長】 渡邊健二様です。

【渡邊委員】 よろしくお願いいたします。

【岡本学務部長】 ありがとうございます。

続きまして、大学側関係者の紹介をさせていただきます。学長、両学部長、各センター長、資料館長の順に自己紹介をよろしくお願います。では、学長からお願います。

【磯見学長】 磯見です。どうぞよろしくお願いいたします。

私、正直なところ、任期が今年度の3月までですけれども、その間に何とか私にとっての最後の締めくくりとしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【細川美術学部長】 美術学部長の細川でございます。今日はお忙しいところをありがとうございます。これからいろんな貴重なご意見をお聞かせ願いたいと思います。よろしくお願いいたします。

【戸山音楽学部長】 音楽学部長の戸山です。どうぞよろしくお願います。

【寺井芸術創造センター長】 芸術創造センター長の寺井でございます。国際交流、そして地域連携を担当しております。どうぞよろしくお願います。

【長谷芸術情報センター長】 芸術情報センター長の長谷でございます。2時間どうぞよろしくお願いいたします。

【山本芸術資料館長】 芸術資料館長の山本です。どうぞよろしくお願いいたします。

【岡本学務部長】 それでは、引き続きまして、本日の次第につきましてご説明いたします。お手元の次第をごらんください。

まず、議長を選出いただきまして、その後、大学側の大学活動の報告、次期中期目標・中期計画の内容について説明申し上げます。それに引き続きまして、委員の先生方からご意見、ご助言をよろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、早速議題のほうに入りたいと思ひます。

議題の1、議長の選出についてでございますが、事務局からの提案といたしまして、名古屋ポストン美術館長の馬場先生にお願ひしたいと思ひますが、いかがでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

【岡本学務部長】 異議がないようですので、これ以後は馬場委員に議長をよろしくお願ひします。

【馬場議長】 馬場でございますが、どうぞよろしくお願ひいたします。非力でございますけれども、何とか皆様のご協力のもとに評価の最終的な結論を得たいというように思っています。どうぞよろしくご協力をお願ひいたします。

それでは、早速議事に入りたいと思いますが、議題2は、愛知県立芸術大学の活動報告でございます、主に平成22年度と、それから23年度の研究活動について、資料が配付されておりますけれども、その目次に従って、報告をこれからさせていただきますので、大学のほうからよろしくお願ひいたします。

【岡本学務部長】 それでは、事務局のほうからご説明申し上げたいと思います。

大学組織につきましては、ご存じのように、美術学部、音楽学部、それぞれ美術研究科、音楽研究科、それ以外に芸術教育・学生支援センター、芸術創造センター、芸術情報センター、図書館、芸術資料館といった施設がございます。

それから、事務部門としましては、管理部、学務部の2つに分かれておまして、管理部については管理課、学務部については学務課と芸術情報課に分かれてそれぞれの事務を行っております。

続きまして、愛知県立芸術大学のシンボリックな成果につきましては、主として平成19年の法人化に伴う第1次の中期計画、これによります成果ということで、(1)として質の高い教育・研究の推進、(2)としまして地域貢献・連携の強化、(3)としまして国際交流の推進といった項目に分かれております。

それで、1つ目の(1)質の高い教育・研究の推進という項目ですけれども、美術と音楽の複合芸術プロジェクト「オペラ公演」につきましては、過去10年以上やっております、美術学部による舞台制作と音楽学部による演奏を結集しましたハイレベルなオペラを毎年開催いたしておまして、好評を博しております。平成21年度からは長久手市以外でも公演を行いまして、観客数も増加しております。

ちなみに、平成21年、22年では長久手以外では大府市で開催しておまして、平成23年と今年に関しましては、長久手以外では刈谷で開催いたしておまして、24年度は12月に開催する予定になっています。

2つ目としまして、国宝・文化財の模写研究の推進につきましても、ご存じのとおり、自治体や外部からの受託研究など外部資金も活用しまして、法隆寺金堂の壁画をはじめとしました文化財の模写に取り組んでおります。後で説明がありますが、23年度には松坂屋の美術館におきまして学外で初めて展示をいたしておまして。

3番目といたしまして、アーティスト・イン・レジデンスの実施、これは平成19年度から始めておりまして、国内外のレベルの高いアーティストの方々を招聘いたしましてワークショップや教育プログラムなどを実施しておりまして、本学における教育、研究の活性化につながるとともに、国際交流の進展にも寄与しております。毎年4名ぐらいの方をお招きして開催しております。

次に、大学院の充実としまして、平成21年4月1日に博士後期課程を設置しまして、高度な芸術教育を実践しております。

次に、民間資金を活用した新学生寮の整備、これにつきましては、平成21年度に新たな女子学生寮を整備しております。

サテライト講座の開講につきましては平成19年度から取り組んでおりまして、愛知県芸術文化センターなどにおきまして開催しております。平成23年度までに講座数は151、参加者は延べ4,500人を超えておりまして、多くの方々にアートに触れる機会を提供いたしております。平成24年度からは芸術講座としまして新たにスタートして、今年度も20を超える講座を開催いたしております。

その次に、高大連携遠隔事業につきましては平成20年度から行っておりまして、愛知県の教育委員会のスーパーハイスクール研究指定推進事業として3年間の外部資金を獲得して、岩倉総合高校と光回線で本学を結び、モニターとマイクを通して双方向のコミュニケーションを図りながら遠隔指導を行う授業をやっております。その後、3年間の外部資金がなくなった後も継続して、自主事業として現在まで開催しております。

次に、名古屋栄のサテライトギャラリーの開設は、平成22年度に名古屋の中心部の中央広小路ビルというところにサテライトギャラリーを開設しました。オープニング事業としては、あいちトリエンナーレ2010とパートナーシップ事業としてオープニング展を開催いたしております。それ以降は、展覧会やワークショップを開催しまして、本学の情報発信の場として活用いたしております。それに加えて、商店街の歩道には教員や卒業生の彫刻作品を設置しましてにぎわいを創出いたしております。

次に、瀬戸内アートプロジェクトでございます。これにつきましては、瀬戸内国際芸術祭2010に大学プロジェクトとして参加しまして、女木島の空き家を改装して、芸術祭の活動拠点となります「MEGI HOUSE」を開設いたしております。ここにおいて、展覧会、コンサート、ワークショップなどに加えて、美術と音楽の複合表現によるパフォーマンスなど多彩なプログラムを実施いたしております。

次に、藤沢アートハウスの開設でございます。これは、平成23年度に、地元の豊田市との連携によりまして、旧豊田市立藤沢こども園を活用しましてアートハウスを開設いたしました。ここにおきましては、教員や学生の制作研究のアトリエや公開制作の場としまして、また、ワークショップなどを通じた地域住民との交流の場として広く活用しまして、文化振興、地域活性化に寄与しております。

次に、東日本大震災被災地支援につきましては、愛知県芸文センターが開催したチャリティーコンサートに出演協力するとともに、本学の教員、学生主催によります愛・知・絆チャリティーコンサートを開催しまして、復興支援の輪を広げております。

次に、国際交流の推進でございます。

まず、国際交流協定校の拡大と積極的な国際交流の推進につきましては、平成19年度以降、それまで学術交流協定校が1校であったところを10校に拡大しまして、アーティスト・イン・レジデンスの講師の招聘やエジンバラ美術大学及び美術学部教員による合同展覧会の開催など、活発な交流活動を行っております。また、音楽学部では、平成23年度に海外留学奨学基金を拡充しまして、学生の留学を支援、推進して、今年度より協定校に2名の学生を派遣しております。

次に、南京芸術学院と上海万博日本館での初の海外公演を実施につきましては、愛知県と江蘇省の友好提携30周年で、本学と南京芸術学院の交流提携25周年に当たりまして、南京芸術学院との合同演奏会を南京において実施しました。また、その後に、上海万博日本館愛知県ウィークにおきまして演奏を披露しまして、多数の来場者に対して愛知県のPRを行いました。

愛知県立芸術大学のシンボリックな成果についての説明は以上です。

【馬場議長】 ただいま、シンボリックな事業のことについていろいろご報告いただきました。質問だとか討論は、まとめて後でさせていただくことにしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、引き続き説明のほうを続けていただけますか。

【寺井芸術創造センター長】 寺井でございます。よろしくお願いいたします。

公開講座についてご説明申し上げます。

公開講座は、音美ともに大体専攻ごとに年1度程度開かれておりまして、そちらの講座に関しましては、私が担当しておる芸術創造センターではございませんが、一応この4ページにございますように、美術のほうではこういった講座が開かれております。音楽の

ほうも、専攻ごとにピアニスト、作曲家、さまざまな先生にお越しいただきまして開催しております。

芸術創造センターでは、5ページ、次のページにございますが、22年度サテライト講座で、7ページにございますように、23年度のサテライト講座、ここにございますようなこういった講座を年間に大体20講座ないし30講座程度を愛知の芸文センターを中心にして開催させていただいております。

ただし、昨今の予算等の削減により愛知県の芸文センターのほうでもいろいろな事情がございまして、無料で開催させていただいていたものも有料になったり、さまざまな事情がございまして、芸文センターに限らず、もう少し積極的に愛知県内のいろいろな自治体で講座を開いていくこともよかろう、そして大学内での講座も行っていこうということで、今年度からは、芸術講座と名称変更させていただきまして、同様に本年度も20講座程度開かせていただいております。

22年度は、ごらんいただきますと、こういうさまざまな美術に関するもの、音楽に関するもの、座学はもちろん、そしてコンサート、そしてコンサートの中で講師がレクチャーをしたりワークショップのような形態をとるようなそういう講座と、さまざまなものを開催しております。

7ページの23年度も、座学、そしてレクチャーコンサートのようなものを開催させていただきました。本年度のはこちらにございませんですけれども、本年度も同様に音美ともにさまざまなものを開催させていただきました。

1つ、公開講座で今年、特に連携というところを重視いたしまして、資料にございせんが、芸文センターと本学の芸創センターの共催という形をとりまして、ジョン・ケージの講座を開催させていただきました。資料をおつけすればよかったですけれども、こういった形で、さまざまな自治体と連携をとって講座が開催できないかというところを今模索しております。本日も、豊田市さんのほうともお話をさせていただきますので、今後こういった連携の講座をどんどん増やしていこうと思います。

あと、昨今の子供講座が特に重要かと思っておりますので、子供向け、若者向けの講座を今後どんどん実施していくということにしております。24年度、今年も打楽器の講座を開催させていただきましたが、非常に評判がよくて子どもの食いつきもよろしいようですので、そちらのほうに目を向けていこうと思っております。

次は、海外の学術交流協定校一覧というのがございますが、8ページをごらんください。

現在、大学では、ここにございますような、音楽、美術ともかなりの数、協定校が増えてまいりまして、音楽のほうでは、ケルン音大、マンハッタン音楽院、クラコフ音楽院、ソルボンヌ大学、ハンブルグ音大、リスト音楽院、このようにたくさん協定校ができてまいりましたが、特に本年度から、先ほどもお話があったと思うんですが、交換留学を実際に実施しておりまして、2名が先方の大学に行っております。さらに、今、リスト音楽院も来年度の交換留学に向けて今動いておるところです。

南京芸術学院ですが、南京芸術学院は音楽に限らず、音美両方で交流を行っております。今年度、南京芸術学院が100周年で式典がありまして、そこに本学から学長先生以下3名の方が出向かれる予定だったのですが、昨今の中国情勢もございまして、先方とご相談させていただきました結果、今回は少し遠慮させていただいて、また折を見て始めようということになっております。

美術学部のほうは、ここにございますように、エジンバラ美術大学、ボストン美術館芸術大学、シラパコーン大学と協定を結んでおります。現在、タイのチェンマイ大学の美術学部と本学の美術学部と協定を結ぶことを目指しておりまして、1月に協定を結べるのではないかなと思っております。

あと、下のほうに3つの表がございまして、ロンドンのセントラル・セント・マーチンズに関しましても、現在協定に向けて進めておりますので、今年度中には何とか協定が結べるのではないかなと思っております。それ以外、台南とか、韓国に関しましては、昨年度、美術の3名の先生が韓国に行かれまして協定に向けていろいろ研究されておりますので、韓国のほうも協定に向けて今進めております。

次に女木島プロジェクトでございまして。

先ほどもお話にありましたが、北川先生もおみえですけど、一昨年度に瀬戸内国際芸術祭が初めて開催されまして、そちらのほうに本学としても参加させていただくこととなりまして、女木島の、高松市の大体フェリーで15分か20分程度のところなんですけれども、そちらのほうに「MEGI HOUSE」というサテライトを設けまして、そちらのほうでさまざまな展覧会、そしてコンサート等をさせていただいております。9ページに女木島プロジェクトについて書かれております。「MEGI HOUSE」は、ここにございますように、本学の教員でございまして井出先生の「想起の床」とか、ここにございますようなさまざまなアート、または音楽によって1つの建物を構成しております。その中でコンサートは、10ページにございますように、こういったさまざまなコンサートなり

展覧会をさせていただいております。

それで、国際芸術祭は来年度もごございますのですが、基本的にトリエンナーレでございますので、3年に1度、大きな形での取り組みとなっておりますが、その間の年、今年とか去年のような年にも、さまざまな取り組みも行っております。14ページに、2011年度、これはもう昨年度になりますけれども、トリエンナーレの年ではないときにも、こういった形で、特に学生たちの発表の場、教員の発表の場としてさまざまな形でイベント、コンサート、さまざま行っております。

来年度がまた国際芸術祭の年でございますので、来年また本学らしい発表ができるように現在計画を進行しております。

あと、アーティスト・イン・レジデンスについて、先ほどお話にございましたが、このような冊子を2年に1度作成しております。お手元には2010年度のアーティスト・イン・レジデンスの様子が写真入りで紹介されております。昨年度、今年度分につきましては現在作成中で、今年度3月にはできると思います。

芸術創造センターに関連する事項といたしましては以上です。

【馬場議長】 ありがとうございます。

それでは、引き続き展覧会の開催状況を山本先生からお願いします。

【山本芸術資料館長】 芸術資料館主催の展覧会の状況をご説明したいと思います。22年度、23年度にわたるものになります。

本学では、本館に当たります芸術資料館と、それから別館になります法隆寺金堂壁画模写館がございまして、本館の芸術資料館では、企画展として22年度はアイチ・ジーンというアウトリーチの展覧会をメインに据えて動いておりました。それで、法隆寺金堂壁画模写館では秋季、春季と分けまして、法隆寺の模写を中心として、模写事業で得た成果を順次公開しているという形をとっております。22年度は、アイチ・ジーンというアウトリーチの展覧会を資料館本会と清須市のはるひ美術館、それから豊田市美術館で開催しております。22年度に関しましては、収蔵品展「1900—from the collection」という展覧会と、もう一つは、先ほど出ておりました松坂屋美術館と連携をとりまして、法隆寺模写の全部を松坂屋美術館で展示するというような形をとっております。

18ページ、19ページには、22年度、23年度の法隆寺模写展示館の展示内容が述べられております。

23ページですが、ここに愛知芸大の芸術資料館として初めて現代美術に取り組んだ形としてアイチ・ジーンが取り上げられております。これは、はるひ美術館と豊田市美術館のご協力を得まして、約40日ほどの期間、開催することができております。焦点を当てましたものは、愛知芸大を卒業した作家をセレクトしており、サウンドパフォーマンス、あるいはワークショップを行っております。25ページから26ページに掲げられておるものでございます。

それから、27ページ、「愛知県立芸術大学模写研究40年の歩み」という松坂屋美術館で行いました模写店の報告がここにあります。こちらは、法隆寺金堂壁画模写展示館の壁面に取りつけられておりました120キロほどあるパネルを移動しまして松坂屋美術館で展示いたしました。当初の見込みよりもはるかに大勢の方がいらして、2万3,000人を超える入場者がありまして、これは松坂屋美術館のほうもびっくり、我々も驚いているというところでございます。これに関しては、模写を知らしめるという意味では相当な効果があったのではないかなと思います。

それから、サテライトギャラリーを先ほどもありましたように平成22年度に開設いたしました。20ページと21ページにその展覧会の内容が網羅されております。22年度の5月にオープニングを行い、十二、三回の展覧会がそれぞれ毎年行われておりますけれども、平成22年度のあいちトリエンナーレに絡んだ展覧会では、佐藤克久・猪狩展に関しては3,300人ほどの入場者、また、本学の教授の寺内先生の場合には3,500人を超える入場者がありまして、これはトリエンナーレの観客が同じビルに入っていたということもありまして、非常な来場者で大変混雑をしたということがありました。

23年度には、卒業生、あるいは国際交流を交えた展覧会を行っております。入場者実績は、サテライトギャラリーそのものがまだまだ知られていないということを反映して、トリエンナーレのときよりも減しておりますけれども、本年度はほぼ展覧会を連続させまして、入場者はかなり増えております。

それから、もう一つは、先ほど話に出ておりました、豊田市との連携から浮かんでまいりました、豊田市の藤沢こども園という8年ほど前に廃園になったこども園を使用しまして、研究あるいは制作の場として平成23年度より活用を始めたところでございます。定期的にはなかなか開催できませんけれども、住民向けのワークショップ、あるいは演奏会を開催して、徐々に徐々に認知をしていただくというところに差しかかっているのではないかなと思います。24年度もさまざまに演奏会、展覧会を開催しており、ちょうど先週

にも卒業生2名の合同展が終わったところですが、過疎地にある保育園、そういうようなものを有効活用していくという1つの方法論ではないかと思えます。

私の説明は以上です。

【馬場議長】 ありがとうございます。

それでは、長谷先生、引き続きよろしく願いいたします。

【長谷芸術情報センター長】 それでは、芸術情報センターからの活動の報告をさせていただきます。芸術情報センターということで、その中の一番核は図書館でありますので、図書館の活動についてご報告申し上げます。

その中でも、平成20年度から行っております共同図書環事業という、「カン」という字は環境の「環」でありまして、図書館の「館」のほうではない字を使っております。それはどういう内容かと申しますと、平成20年度の文科省の戦略的・大学連携支援事業の「共同図書環のネットワークシステムの構築と新たな教養教育プログラムの開発」という内容で、この長久手地域にあります愛知県立大学、そして愛知淑徳大学、名古屋学芸大学、名古屋外国語大学、そして我が校の5つの大学が連携して、大学間で図書館を共有して活用しようという実験的な利用者参加型の取り組みの企画が通りまして、それを3年間、文科省から戦略的な資金をいただけるのが3年間でございますので、平成22年度まで3年間で終了しました。その戦略的・事業というものは、文科省から資金が終わった後も基本的には続けるようにという内容になっておりますので、平成23年度以降3カ年を継続することを大学間で合意を得て現在も続けております。

現在は、図書館の2階にこの事業で購入した共同図書が2,000冊あります。そして、かなり学生にも活発に利用していただいております。それから、連携校全体では、この5大学で23年度末の時点で1万2,600冊というかなりの本を購入させていただいております。それを専用のネットワークシステム、T o s h o R i n g というシステムで検索することができます。このシステムは、ほかの連携校にある共同図書の取り寄せを行うことができます。淑徳にある本を借りたい場合には淑徳に連絡をすれば、それはこっちへ持ってきてくれるというような、それぞれのお互いの大学間でそういう共通な行為を行うことができます。そして、取り寄せた大学の図書館の書架にその本を並べることができます。このようにして共同図書は大学間を回り、あたかも環のように連携校の学生をつないでいきます。

また、T o s h o R i n g には読んだ図書の書評や感想文を書き込む機能があります。

これまで約1,700件の書き込みがございます。これらは学生の共有財産ともなっているということです。

このほか、共同図書環事業では連携校の学生が積極的にかかわれるようなイベントを行っています。学生が直接書店に行って、これは教員も一緒に行くんですけども、共同図書環に入れたい図書を選ぶ選書バスツアーというツアーを開催しまして、本屋さんに行って1人何冊というような形で本を購入することができる。それをもとに、学生がお薦めの図書を紹介する交流会なども行っています。本学からも学生が参加して、また、教養教育の先生によって授業に活用されています。T o s h o R i n g の書評を書き込むシステムを使って、受講生が実際に書評を書くというようなものも授業の中で行っていたりもします。こうした活動を通じて共同図書環は学生たちにとって身近な図書館として定着していますので、これからもぜひ続けていこうというふうに考えております。

以上でございます。

【馬場議長】 ありがとうございました。

続いては細川先生、どうぞよろしく願いいたします。

【細川美術学部長】 まず、それでは、美術学部のほうも展覧会の開催状況ということでございまして、平成22年度から平成23年度、これは主に、先ほど山本先生のほうから紹介のありました芸術資料館での主催以外のもので、美術学部がメインで行ったというような事業であります。ただ、この22年、23年の中に、平成22年度卒業・修了制作展（第1会場）というのがございますが、これは愛知県の芸文センターで行ったものでありまして、22年も23年もそういうことで、芸術資料館ではない部分も入っております。これは卒業・修了制作展ということで一大イベントということでありますので、入場者数も非常に多いということでございます。

それから、あと、博士課程のほうの後期課程の作品展示も23年度にやっております。これは、後ほどお話ししようと思っておりますけれども、博士後期課程が21年度に立ち上がりまして初めてのドクターの学位授与ができたということで、この3人の学生が出たわけですが、そのことも後で申し上げたいと思っておりますけれども、その展覧会ということでございます。

それから、そのちょうど次のページですが、39ページに今申し上げました博士の学位を授与したということで、3名、美術研究科の美術専攻、油画・版画分野の王さん、これはモンゴルからの留学生でございます。それから、2番目に坂本さん、これも同じく油

画・版画分野ということでもあります。それから、3人目の林さんですが、韓国からの留学生ということで、同じくこれも美術専攻でありますけれども、デザイン分野ということで、この3名が初めて本学からの博士を授与された学生ということでございます。

それから、続きまして、遠隔授業でございますが、これは先ほどもお話がありましたように、平成20年度より愛知県の教育委員会のスーパーハイスクールという指定事業ということで、県内にあります岩倉総合高校とこの愛知芸大をNTTの光回線で結びまして、高品位のハイビジョンレベルの映像とマイクを通して双方向でコミュニケーションを図りながら授業を行ったということで、平成22年度、こちらにありますように美術と音楽、それぞれここに掲げておりますタイトルで授業を行っております。23年度も同じようにやっております。

ということで、実際には3年間の活動に対する外部資金が、これで切れるわけですが、これも継続してできる限り続けたいと思っております。

簡単ではございますが、今のところ、この美術学部では、それぞれ女木島ですとか、それからあいちトリエンナーレ関係で重なっているところがございますので、美術学部としては少ないように思われるかもわかりませんが、そちらのほうで表現されていると思います。

それから、あいちトリエンナーレ関係が少しかかわるんですが、2013年度、来年度ですけれども、あいちトリエンナーレが開催されます。それに向けて継続期間中ということで3大学の連携事業というようなことも進めております。このようなアートラボというところを使いまして、名古屋芸術大学、名古屋造形大学、それから愛知芸大の3大学でこういう事業も行っております。

以上であります。

【馬場議長】 ありがとうございます。

それでは、戸山先生に音楽学部の報告をよろしく申し上げます。

【戸山音楽学部長】 音楽学部の演奏会の開催状況について簡単に説明させていただきます。

ここでは、学内そして学外という言い方をしておりますが、皆さんおわかりのとおり、この大学が位置しているロケーションの関係で、やっぱりどうしてもまちの中に出でいかなるを得ない。ここで全ての演奏会をやって、この学内の中でお客さんを呼ぶというのはなかなか難しいものですから、どうしてもこういった学外の演奏会が多くなり、約30回

弱の演奏会が学外で行われています。

そのうち、例えばオーケストラに関しますと、オーケストラだけの演奏会だと年間に4回、学外が3回、そして学内が1回ですね。そして、それプラス、うちにはオーケストラが1つしかありませんから、オペラのオーケストラも同じく学生によるオーケストラが弾いております。ですから、オーケストラはかなり忙しいと思います。そして、卒業演奏会、定期演奏会、これはどこの音楽大学もあると思いますが、それ以外は、アーティスト・イン・レジデンス関係、そして各専攻コースが独自にやっているコンサート、そういったことを行っております。

そのほかに、実は、これまでの音楽大学では、卒業、修了すると、はい、さようならと行って、わりとその後のケアがほとんど何もないんですけれども、昨年度から、優秀な卒業生、修了生、卒業してからもきちんとちゃんとした音楽活動を続けている学生たちを支援しようという試みが始まりました。栄の真ん中にSMBCという銀行がありまして、そのロビーをお借りし、そこで優秀な卒業生たちに演奏をしてもらおうというものです。これはやはりある程度のレベル以上でないと困りますから、各専攻コースでもってきちんと推薦をいただいています。またわざわざばかりですが、その出演料として、愛知県立芸術大学を支援する会（愛芸アシスト）から支援いただいております。今年2年目を迎えますが、基本的に年間12回、つまり一月に1回はそういった演奏会が行われているという状況です。

あと、学内演奏会、これは単位化されていて管打楽器コース以外は全て必修となっております、奏楽堂で行われています。ここにポピュラークラシックコンサートとありますが、これはオーケストラの演奏会です、できるだけ親しみやすいプログラムを組んで近隣の方々にオーケストラを聴いていただくと、そういったことでやっております。

そして、理事長特別研究複合芸術プロジェクト、これは先ほどから何度もオペラのお話が出てきていますが、いわゆる芸術大学で音楽学部と美術学部を備えていても、なかなか一緒に何か1つのものを研究していくという授業、あるいは試みが意外とないんですね。実際にやろうとすると難しいんですが、本学では10年以上前から、オペラ公演自体を始めたのは20年前なんですが、ちょうどそれがバブルがはじけたころに始まったものだから非常に予算的には厳しいときに始めましたが、その10年後から美術学部の教員の方に助けを借りまして、そのときはデザインの先生だったんですが、舞台美術をお願いし、始まりました。

そして、3年前から、これは学長とそして前美術学部長の長谷先生のお力によるところが大きいのですが、美術学部の全専攻全てで、ローテーションでもって舞台美術を必ずやっていくということが始まりました。最初はなかなかきつと難しかったと思うのですが、いざやってみると結構楽しそうにやってくださっているような気がしています。スタートしたときは、まず油画専攻は、「コシ・ファン・トゥッテ」でした。そして、次が、日本画専攻での「カルメン」。そして、去年がヨハン・シュトラウスの「こうもり」を彫刻専攻がやりました。今年は「ヘンゼルとグレーテル」を陶磁専攻がやります。これは、まさしく本学でしかできないことだと思いますが、なかなかおもしろい舞台になっています。これは、先ほど頭にシンボリックな成果という部分で出てきましたが、芸大として実におもしろい試みだと思います。

以上です。

【馬場議長】 ありがとうございます。

以上で大体活動の状況のご報告が終わりました。ちょっと盛りだくさんでございますけれども、引き続いて次期の中期目標、中期計画についてお話を伺った後で、これから討論を行いたいと思います。引き続きどうぞよろしく願いいたします。

【磯見学長】 次期の中期目標・計画について説明します。

ちょうど今年で法人化されて6年目でして、第1期の中期目標・計画が一応終了をいたします。今、全学の美術、音楽、それぞれの将来計画委員会という、比較的若い人たちに集まっていただいて、そこで次期中期計画についていろいろと論議をさせていただいています。その中から出てきたものが今ここにございます次期の中期計画の柱になっております。

この中期計画は3つの、教育、研究、それから地域連携・貢献というような形で整理されておりますけれども、年度計画といった細かいところまではまだ詰めておりません。

まず、入学者選抜については、これからやっぱり少子化等がありますけれども、その中でどれだけ優秀なとか、芸術に向く学生をどうやって獲得していくかということが、当然入試の広報活動ということにつながってくるだろうと思いますけれども、レベルを下げないようにするということが1つ大きな課題です。

学部教育それから大学院教育につきましては、これまで四十何年かの教育の実績があるわけですから、まずはこれまでの実績、教育の継続と、それから次に、やはりそれを進化、そこに『進化と深化』の観点から」とかありますけれども、進化させ、また深化させるということの基本にして充実させていこうというのがまず柱です。今急に何かを抜本的に

変えていくというよりも、やはりこれまでの教育の流れを継承しながら、それを進化させていこうというのがまず基本的なことです。

もう一つは、国際化といいますか、教育のレベルを国際的な水準に持っていくというのが1つ大きな目標になります。それと、先ほどからオペラの話が出ておりますけれども、こうした音楽と美術が協働してやっていくという部分というのをなるべく広める。今、実績としてはオペラがあるんですが、オペラにとどまらずに、ほかの現代音楽との美術、現代美術というような形も考えられますし、実際にそれを授業としてやっていることもありますが、そういった音楽と美術との協働でその領域を少し広げていくということが1つあります。

それから、本学は日本画の模写の授業がわりと古くからやられておりますので、文化財等をもう少し拡大して、模写だけではなくて修復のようなことへ広げていく、あるいは、日本画だけではなくてもう少し別の分野にもそれを広げていく、それも1つの目標になっております。

卒業認定、修了認定について、これは今非常に教育の質の保証というのを文科省等でよく言われておりますけれども、そういうことを踏まえていこうということです。

学生への支援として、留学生、学生が国際的に国外で学ぶ機会というようなものもやはり増やしていかなければならないだろう。全体に大学の位置を国際的な中で考えていくということが1つ大きくあろうかと思えます。

研究についても、教育とリンクして、やはり海外の提携校をもう少し増やしていたり、芸術活動をやはり少し広げて、日本国内だけではなくて外国へもそれを展開していこうということになります。

地域連携・貢献については、愛知県の県立大学ですから、もちろん地元の県の人々に我々の成果といいますか知的財産を、この地域の文化、芸術に今貢献していくということが基本的にありますけれども、それだけにとどまらずにその範囲を広げていきたいというふうを考えております。

その辺が次の中期目標の内容になります。目新しいということはありませんけれども、実質的に大学を発展させていくというふうな方向で今中期計画を考えております。

簡単ですけれども、以上です。

【馬場議長】 ありがとうございました。

今の磯見学長のお言葉で、大学からのご報告は一応これで終了させていただきたいと思

います。それでは、これから皆様のご意見を伺っていきたいと思っております。

先ほどのご報告をお聞きいただき、ご意見だとか疑問点だとか何かございませんでしょうか。

【渡邊委員】 ちょっと全体を通して幾つか質問させていただきたいんですが、よろしいですか。

【馬場議長】 どうぞ。

【渡邊委員】 順番にいくと、3ページのこちらのサテライト講座とかギャラリーのこと、そこで行われているものについて一応一覧表とかあって、参加者の人数は延べでは書いてあるんですけども、各講座ごとの何人ぐらいいらっしやったのかというようなことは多分お持ちですよ。例えば、5ページ、6ページ、これ、定員は書いてあるんですけども、実際には何人がいらっしやっているのか。

【磯見学長】 実際どのくらい入ったかということですね。

【渡邊委員】 最初のところ、4ページに参加人数が全部書いてあって全体はわかるんですけども、講座毎のがあるといいかなと思いました。

それから、これはそれぞれアンケートなんかをとっていらっしやいますか。各講座ごとにアンケートとかそういうのは。

【寺井芸術創造センター長】 アンケートは毎回必ずとっております。

【渡邊委員】 どんな評判とか、高い評価を得ているとか、これはもしあればそういうのをばんと載せるといいかなと思うんですよ。

それから、質問だけですから意見はちょっと後で言いますけれども、15ページに、これは女木島のことなんですけれども、愛知芸大公募プログラムと書いてあるんですけど、これは、愛知芸大が何に対して募集をかけたんでしょうか。学内の公募ですか。それとも学外公募ですか。15ページ、女木島プロジェクトで4つほどあるんですが。

【寺井芸術創造センター長】 これは、委員会、プロジェクトチームのほうで計画いたしましたプログラム以外に、学内の学生、そして教員に対して4プログラム程度を公募いたしましたして、その中から採用されたものがここにあります。

【渡邊委員】 学内公募ですか。

【寺井芸術創造センター長】 はい。学内です。

【渡邊委員】 ありがとうございます。

それから、29ページにある例の図書環の、これは文科省からのお金で、新たな教養教

育プログラムの開発というのになったということですけど、そのプログラムはどのようなものができたか、そういう報告書みたいな、何か形になったものはないんですか。

【長谷芸術情報センター長】 文科省への報告書はありますが、今ここにはちょっと用意していません。

【渡邊委員】 どんなものができ上がった。やっぱり何かプログラムとしてでき上がったんですか。

【長谷芸術情報センター長】 教養教育の授業で、この図書環事業を使って、先ほどちょっとお話ししましたけれども、具体的な書評の書き方というような内容です、具体的には。

【渡邊委員】 なるほど。じゃ、例えばこういうカリキュラム的なものができたとか、そういうわけではないんですね。

【長谷芸術情報センター長】 ではないんです。先生方の授業の中で、これを使って授業の展開をしたということなので、新たにカリキュラムに1つのプログラムができたということではありません。

【渡邊委員】 ではないと。図書館ってこういう使い方をすると教養教育にもっと役立つよみたいな、何かわりあいと実務的な、具体的なものをつくられたということですね。

それから、横長の音楽学部のほうの例の学外演奏会の一覧、これは、例えば依頼演奏とかも一緒に入っていますか？

【戸山音楽学部長】 はい。受託なんかもあります。

【渡邊委員】 受託、そういうようなのも全部ひっくるめてということですね。

【戸山音楽学部長】 はい。そうです。

【渡邊委員】 依頼演奏って大体どのくらいの数なんですか。

【戸山音楽学部長】 依頼というのは、大学独自に主催でやっているものもあれば……。

【渡邊委員】 主催は別にして、頼まれて、ちょっと弾きに来てくれないかと言われていくようなもの。

【戸山音楽学部長】 いや、ありますよ。例えば、サラマンカホールからの依頼です。平成22年度に。

【渡邊委員】 大体大ざっぱに言って、10件、20件、30件、40件、50件、60件の。

【戸山音楽学部長】 そんなにはないですね。

【渡邊委員】 10件ぐらいですか。

【戸山音楽学部長】 5件未満だと思います。

【渡邊委員】 なるほど。ありがとうございます。

【寺井芸術創造センター長】 室内楽、3人とか4人とか、そういった室内楽の編成では芸創センターのほうに依頼がございまして、大体年間に20から30ございます。

【渡邊委員】 ありがとうございます。

【長谷芸術情報センター長】 それは学生の派遣も入れると、もっとあるんじゃないでしょうか。

【寺井芸術創造センター長】 ですから、これ以外に室内楽がございまして。派遣がです。

【渡邊委員】 それから、最後の中期目標のところ、この中期目標自体は大学のほうでつくっているんですよね。県がつくっているのではないですよね。

【磯見学長】 中期目標は、ご承知のように県が出すんです。

【渡邊委員】 出すんだけど、実際につくっているのは、大学ですよ。

【磯見学長】 そうですね。

【渡邊委員】 このレベルの、ある意味じゃ非常に大ざっぱなものでいいんですね、これは。

【磯見学長】 前回の第1期が二百何十項目か非常に多くの項目があったんですね。これは県もちょっと反省がございまして。

【渡邊委員】 さすがに自分たちでやっておいて、自分が首を絞めたというふうで。

【磯見学長】 そうですね。ですから、大幅に減らしました。

【渡邊委員】 なるほど。これは今、中期目標が大きく言えば3項目で、細かく言ったら1、2、3、4、5、6しかない、それに対して24の計画があると、このぐらいでいいだろうということになったということですね。

【磯見学長】 そうですね。これからまた細かい年度計画が出てきますね。

【渡邊委員】 年度計画ということですね。

それで、ここに、博士課程の副指導教員を配置するというのが書いてあるんですけど、今現在は副指導教員はいないんですか。

【細川美術学部長】 まだ、完成年度になっていないので、博士を教えらるる教員について毎年設置審の審査が入るため、こういう状況です。

【渡邊委員】 なるほど、今、立ち上げのときですね。分かりました。一寸早とちりし

ていました。ごめんなさい。それで、審査をこの間されたわけですよね。そのとき、外部審査員という方は呼ばれました？

【長谷芸術情報センター長】 呼んでいません、今年は。

【渡邊委員】 そうしなきゃいけないと言っているんじゃないかと、ただの質問です。審査会は公開ですか。

【長谷芸術情報センター長】 公開です。

【渡邊委員】 なるほど。作品を公開して、実際に審査の口述試問、そういうものも公開された。

【長谷芸術情報センター長】 公開です。

【渡邊委員】 なるほど。ありがとうございます。

【戸山音楽学部長】 音楽の場合は、実は今年、学位審査が1件あるのですが、それは外部審査員を入れます。

【渡邊委員】 演奏は公開にしても、やっぱり口述も公開される。

【戸山音楽学部長】 そうです。ただ、今回の審査を受ける方は音楽学なので演奏は関係ありませんけど、まだ残念ながら音楽は実績を出しておりません。

【渡邊委員】 なるほど。わかりました。質問は以上です。

【馬場議長】 よろしゅうございますか。また後でもし機会がありましたら。

【渡邊委員】 意見はまた別に。

【馬場議長】 よろしくお願いいいたします。

それでは、北川委員のほうから何かございませんでしょうか。

【北川委員】 2つありまして、伺いたいののですが、社会人の部分というのが大学では積極的なのかそうでないのか、どういうふうにやろうとしているのかをちょっと伺いたいなと思っていますんですね。

【細川美術学部長】 実は、美術学部のほうでは入試で社会人ということで選抜をやっております。ただ、これは条件がありまして、芸術学をつくるときに社会人枠を1つつくることが条件として芸術学専攻を立ち上げた経緯がありまして、そのときに、ほかの油画ですとか彫刻、日本画、全ての美術学部の領域も、若干名ということでそういう社会人の方を受け入れるような入試をとりました。実際にデザインですとか日本画ですとか、数名社会人で実績としては入ってきております。ただ、人数としては若干名ということですので、ほんとうに1名とか、年に二、三名程度でしょうか。ないときもございます。

【北川委員】 少しわかる範囲で言いますと、制作とか作家志望の方は若い人がほとんどだと思っいいのですが、今、美術でいいますと、それを支えていく部分、展開していく部分はかなり大きな要素が増えてきています。需要というのは社会人が圧倒的に多いんですね、すごく真剣です。それを大学ではまだあまりやっいてなくて、通信という形の大学が幾つかありますが、あんまり役に立っいていないようですね。大学ではない様々な現場で、NPOやアートプラットフォームみたいなところの動きがすごく大きくなっいて、その部分を、やられるのかどうかは今後、美術大学というか芸術大学の存在としてはかなり大きな要素になるだろうと思っいて、そこの検討はあるかなと思っいました。

2つ目ですが、こちらの先生をしたので多少わかるので、そんなに絶望的でないと思っているのですが、それはなぜかという、若い人たちの受験、これに関して戦略的に何か少し先行してやっいていく部分が、ここを考え出さないとちょっと厳しいかもしれないと思っいて、それについてご検討されたいいのではないかと。健闘しているけれども、将来的にはやっぱり相当乱戦になっいていくので、そこは要注意かなと思っったんです。

【細川美術学部長】 現在、美術学部では、自己推薦入試といういわゆる自分自身をアピールする入学試験というのをやっいておっいて、定員的にはそれほど、10名というようにことで一応募集人員を決めてやっいておっいますが、そのあたりで相当やっぱり積極的に、デザイン、美術にかかわるような学生が、今のところ、もうこれで10年以上たっったと思っうんですけれども、非常にすばらしい学生が生まれてきておっいます。

【北川委員】 以上です。

【吉田委員】 北川さんと関連してですが、ちょっと順番が飛んじゃいますけど、済みません。

【馬場議長】 大丈夫です。どうぞご発言ください。

【吉田委員】 入試を受けられる方というのは減っっているんですか。少子化というのでもちろんいろいろ厳しい面はあると思っうんですけれども、その辺はどうなんでしょうか。希望者といっいますか。

【細川美術学部長】 美術学部はぎりぎり横ばいですよ。横ばいでずっと。

【吉田委員】 そうですか。といっいますのは、私もこの博物館学の授業をちょっと担当させていだいたり、あと、名古屋造形大学さんのもちょうと担当させていだいてるんですが、学科で結構若い人が希望して多いというのは、今、漫画とかイラストとか映像関係にどうしても目が行っっちゃうんですね。そういうちっちゃいときからそばにゲーム

があったりパソコンがあったりして育ってきたので。ですから、今すぐ例えば課程とか学科のあれを変える必要はそんなにないと思うんですけども、ただ、将来的なことを考えると、真剣に少しずつでも研究するというか向き合うというか、カリキュラムを集中でもいいですから増やしていくようなことをちょっと考えないと、だんだん少子化でもってちょっと苦しいというか、今北川さんがいろんなことを言われたときでちょっと思い出したんですけども。

音楽の場合はどうなのかちょっとわからないんですけども、その辺、若い人と今現在の音楽のほうの関係というのはわからないんですが、特に中期目標といいますか、そういったものところで、上げる必要はないんですけど、何らかの形でそういうのに向き合っていないということも切実に感じています。

切実という意味は、実は、豊田市美術館もどちらかというと現代美術中心で、それで評価も受けてはきているんですが、最近やっぱりそういった分野、例えばジブリやったりとか、いろんなそういったところの美術館とかも出てきて、意外と豊田市美術館、わりと前衛的なものをやっているといいながら、実はよく見ていくと、そういったメディア的なものとかというのはすごくおくらしているし、学芸のほうでもあんまり勉強していないというか、興味を持って、そっぽを向いていたところがあるので、ちょっとやっぱり向き合わなきゃならない部分があるなという反省があるものですから、ちょっと余計なことでしたら申しわけないんですけども。済みません、途中で割り込みまして。

【馬場議長】 いいえ、どういたしまして。ありがとうございます。

【北爪委員】 つながることなんですけど、子供たちが減るといのはもちろんしょうがないんですけども、県芸が今後どういう方向に固めていくのか、または、学費についても私立と比べるとべらぼうに安いわけです。だから、当然受験生は今のところ減らない。それは当たり前なんですけど、そのままでいいのかということですね。

今、お二人の先生から出たんですけど、受験についての研究を進めていくと、やっぱり内容をどういうふう将来的に固めていくか、大学の核になる考え方がどのようなものかというのはもう先取りして考えていないと、法人化で大変僕が驚くほど活発になっていて、6年前までいたんですけど、信じられないくらい法人化で展開されていて、非常にいいと思いますね。

ただ、よって立つ基盤をこれからどうしていくかということ、それからお金の問題も含めてちょっと心配なのは、もちろどこでも若い人の傾向が非常にはっきりと斜めにずー

っとねじれていますから、我々が若いときと全く違う状況ですから、例えばクラシック音楽とか、その延長線上の現代アートといっても、それをほんとうにわかって若者たちがやっているかどうか、これはまた疑わしい。

【北川委員】 それに関して申し上げますと、いろいろやられているのもありますが、現代美術というのはシステムも教え方もないというか、つまり、ワークショップなどでわかることはありますが、アートマネジメントと現代美術は基本的に成立しないんですよ、教えるということが。それをやっていたところは、アートマネジメントについては今全体的に壊滅しました。今現代美術をやり出しているところがありますが、基本的にそれはもう桁外れにすごい知性がある人、例えば丸谷才一さんくらいの方がやればいいのですが、そうでないと中途半端な教育となってしまいます。恐らく今後ますます厳しくなると思いますね。

だから、僕の結論を先に言うと、アカデミズムというか、それは徹底的にやっていっていいのですが、学内でそこから自由なこともできるようにしてあげることがあればいいので、それだけを教え出すとおそらく崩壊すると思うんですね。

【磯見学長】 本学でも、そのことは若い人たちもかなり意識をしまして、やはりこの大学は、東京芸大と比べると非常にある意味では保守的だったわけですけども、例えば絵画は絵を描くとか、そういう基本的なことがまず核にあったということが非常に大きなものじゃないかなと思うんですね。それを核にしなから、今北川フラムさんがおっしゃったように、学生がもうちょっと自由なことを求めたときに対応できるかどうかという場合も、核をやはりきちっと持っていくことが大事で、基本的なものというのはあんまり崩すべきではないかなというふうに僕は個人的には考えているんですけども、今、若い先生たちもそういう意識が非常にあるんじゃないかなと思っています。

【渡邊委員】 やっぱり基本的には、きちっとアカデミズムを守らなきゃだめだと思うんですよ。今言われたように、現代美術というのは、ものすごくひどい言い方をすれば何でもありで、適当に何かやればそれで美術だと言っちゃったほうが勝ちみたいところがあって、作曲家の北爪先生にほんとうに申しわけないですけど、現代音楽もちょっとそういうところが一時期あったと思うんですね。普通の人たちが弾くにはなかなか難しいと。今、現実に東京芸大でも作曲科に入った子たちがきちっとした書法を学ばないんですよ。教えることも少なくなってきたいて、そのために結果的に出てくるものがいかにいろんなアイデアがあったとしておもしろいものが出たとしても、最終的なレベルに達しないとい

うことがすごく今問題になってきていると思うんですね。

【北爪委員】 　だから、アカデミズムの内容も昔と変わってきているんです。だから、それにもちゃんと対応できる大学じゃないといけないと。東京芸大の場合は、大学のほうに対応し切れていないと。エクリチュールできないまま入らなきゃならない学生が増えています。つまり、技法の勉強というんですか、基本的に大学を受けるためにやる勉強をする絶対数が減っているんですよ、もう。

【渡邊委員】 　事実上、ほとんどいなくなってしまうと、教員のほうもそれを専門にやる人間ももういなくなってしまうということもあるし、それを言い出すとほんとうに、今度、じゃ、受験者をどう確保できるかというまた違う方向の話にもなってしまうんですけれども。

【北爪委員】 　受験生の価値基準というのはどうなっているんですかね。芸術系の大学を受ける意識、何をやればいいと思っているんですかね。なんて、今ごろ僕が言うせりふじゃないですけど。

【長谷芸術情報センター長】 　うちの大学の問題じゃないみたいな。

【北川委員】 　僕はすごく積極的に好意的に思っているのですが、今この時代ですから、経済学部とかではなくて、執行猶予として美術大学を受けるというのはものすごくいいと思うんですね。つまり、わからないんだから、何でもありそうに思うところを受けに行っているというのは、かなり評価できると思います。面倒な話になるのですが、かなりしっかりしたことは教え、それに合わない人達もいっぱいいると思いますが、合わない人達を、ついてこないからだめだというんじゃない、いろんな選択肢とか、そこをどういうふうに見せていけるか、いろいろな経験をさせるかということが重要だと思うんですね。そこは何か考えられればいいと思います。

だから、今、僕は、美術系に来る人たちというのは、今の中で、事務系の方がおられてそういう中で言うのもおかしいですが、結構人間的にいいと思っているんです。そんな選択、決められないぞと。

【吉田委員】 　若いときにですね。確かに。

【北川委員】 　それはかなり、ものすごい重要なことだと思っているんですね。だから、そこを何かうまくやれるような大学であるとする、音楽のことはわかりませんが、美術で言えば、ほんとうに一番真っ当な選択肢だと思っているんですね。大げさに言えば、今の世の中で。そこから何か始まるみたいなことがいい。そういう人間がわりと美術系から

出てきていますよね。それはすごく楽しみだと思っています。

作家になる方とか、それはすごく減っていかざるを得ないですが、それはそれでいいと思うんですよね。ですが、ここで学んだことが非常に大きな意味を持つような部分が出てくるんじゃないかと、そうは思っています。

【渡邊委員】 参考になるかどうかわからないんですけども、東京芸大もだんだん就職志望者もぼちぼちと増え始めて、といってもまだ1割強ぐらいなんですけれども、就職説明会を年間合同で二、三回ぐらいやっていて、そこに商社の人も来るようになったんですよ。なぜかという、やっぱりおもしろい連中がいると。何だかんだいって、こんな時代に、今北川先生が言われたけど、絶対食えないことはほとんどわかっているものに、俺はこれをやりたいからといって親の反対も押し切って、5浪も6浪もして入ってくるというのはやっぱり根性はあるわけですね。生活力もあるし。だから、そういう子たちが、実際には作家にとってもなれない、どうやったってなれない子たちが社会でどういうふうに関立っていくかということを考えたら、結構役に立つんですね。

【北川委員】 いや、そうだと思う。例えば今でいうと、アウトドア系は美術系大学が圧倒的に結構入っています。やっぱりタフだし、いろんなことを考えるというようなことがあって。だから、その環境アウトドア系って結構ジャンルは広がっているわけだし、そういうようなことが思わぬところから出てくるので、何かふわーっとなっているのに可能性がかなりあるので、友達もいたり、一生懸命演奏したりなんかする人も横にいるということが重要だと思うんです、先生。そこを何か生かせると、僕はそういう大学になっていくような、芸術系の学校ってそういうものを持ちながらいくような気がすごくしますね。

【磯見学長】 先ほどの社会人について、これは大学の代表としてではなくて個人的意見として、まだ現役で油絵科に所属していたときに、それぞれ社会人入試に関しては専攻によってかなり取り上げ方が違うんですね。全く今までの脈絡の中で社会人が入ってきて、同じように絵を描いて比べるとやはり受験生、今の研究所へ行っている受験生のほうがレベルが高いということですけど、社会人として専門の人、例えば大工さんが大工という木を扱うことの技術を持って芸術大学に入ってきたら、そこにまた何か新しい、芸術と自分のやってきたものが結びつくと、もう少し違う、今まで絵を描いていたのとは違うような表現の可能性ってあるんじゃないかなというふうに一時考えたことがありまして、それを提案したことがあるんですけど、だめだと言われましたが、これから少し考えていく必要があるんじゃないかなというふうに思います。

【北川委員】　そうですね。ぜひ検討していただきたいと思いますが、今、日本の美術のシーンで一番元気なのが横浜のBankARTだと僕は思っています。例えばBankARTスクールには社会人が相当来ていて、有形無形に一番活発な現場を支えている。瀬戸内も、学生のこえびがいるわけじゃなくて、圧倒的に大人のこえびで、いろいろなところで活躍している人たちが手伝っています。その層が、先ほど僕が申し上げたのと逆ですが、大人になって芸術とかの領域と自分がかかわっていて、そこが重要だと思い出した人たちが何らかの形で多少勉強したり専門的な情報を得ながら動きたいという部分があるわけですね。それをちゃんと大学で、通信とかでやっていますが、もうちょっとアクチュアルにやっている大学がないものかと、これはものすごい需要が多いと思います。

横浜のBankARTスクールというのは50人、60人のゼミが続いているんですね。しかも、BankARTがあることによって横浜の再開発が相当うまくいったわけですね、いろんな意味で。ですからおそらく愛知県とか名古屋市ではないけれど、そういう中で今後ものすごく大きな意味を持つと思うので、何かぜひご検討していただきたいという気はすごくしますね。

【吉田委員】　特に愛知県は物づくりというか、トヨタ系をはじめとしてそういういろんなものが多いので、そういうのに携わった人というのが定年になられた人で、きっと能力は持っているんだけど、役立てようがないと思われる人がいるかもしれないという気がします。

【磯見学長】　何かやっぱり意識が変わることによって、その人の持っていたものというのはやっぱり変わってくるんだろうと思うんですね。だから、そういう意味で可能性がとてもあるんじゃないかなと。

【北川委員】　その場合、わりと筋がしっかりしていて現代美術を教えていないというのが重要になる。やっけてもいいのですが、その骨格は違うところに持っていないと、少しおかしくなると思いますね。

【渡邊委員】　団塊の世代が定年退職して、ある程度お金を持っている層が今相当いるわけですね。そういう層の人たちを引きつけるという意味でも、それはなかなかおもしろいんじゃないかと思うんです。大学のシステムから考えると、教授能力という問題があって、そうすると、定員がどのくらい採れるかということもあるんですけども。

【磯見学長】　そうですね。では誰が教えるのかと。

【渡邊委員】　でも、一応認証評価にしても、大学院はある程度たくさん採っても大丈夫

夫ということになっているので、そういう考え方は1つあるかなと。

それから、多分今の若者も、結局金とか物だけでやってきたのがもう行き詰まっちゃったから、もうちょっと精神的なものにかかわってほしいという気持ちは増えてきているのではないかなと思うんですね。そこをうまく刺激してあげると言ったら言葉は悪いんですけども、それも大学が新しく発展する一つの作戦かなという気は私もします。

それと、ここは立地条件がかなり都心から離れたところにあるという、ある意味特殊な大学ですから、それをどういうふうに、逆に活用できるかどうかということだと思えますよ。今、アーティスト・イン・レジデンスという形で、これはなかなかいい活動をされていると思っています。特に音楽科がこういうのかかかわっているのはあんまりないので、それはすばらしいと思うので、逆に離れているところだからこそ人を集めてそこで集中的に何かやるとか、そういうことができたならおもしろいんじゃないかなという気がちょっとしました。具体策はないんですけども。

【長谷芸術情報センター長】 やっぱりどうしても実技系なものですから、施設の問題が一番言われることで、法人化の前に僕も県に、定員の中にいわゆる社会人というのをどういうふうに位置づけるのかというお話ししたときに、定員はいじれない、社会人を採るんだったら定員枠の中で採ってほしいと言われるわけですよ。そうすると、やっぱり一般の学生の枠を社会人に振り分けなきゃいけない。それは大学としては大変なリスクになるので、できたら社会人枠は別に定員をつけてほしいとずーっと要求はしているんですが、定員を増やすこと自体まだオーケーしていただけない。

それはどういうことかという、実技系なので、学部だったら1人当たりどのぐらいのアトリエ面積とかというのが設置基準にあるものだから、それをやっぱりクリアしない限り、うちの大学は今施設の問題もあるので、それをプラスアルファしていく段階で初めて多分定員を少し増やすことができるかなと思うんですが、そのときに社会人枠という話に行くので、ちょっとまだすぐに何かという話はなかなかできないなと。今いろいろご指導いただいているのを早く僕は県に上げていただきたいなというふうに思いますけど。

【吉田委員】 また変な方向にどんどん行っちゃってごめんなさい。いいですか。

とんでもないことをこれから言おうとしているところがあって、そんなのはできないかもしれないんですけど、法人化してお金をもうけてはいけないんですか。

【磯見学長】 いけないんですね。

【吉田委員】 やっぱりだめですか。じゃ、ちょっと話がだめになりますけど、ある程

度社会人を集めて、文化センターじゃないですけど、お金を取ってあれをやってもいいかなという気がしているんですけど、あとは……。

【長谷芸術情報センター長】 それは、国立大学法人とうちの大学、全然法律が違うものですから、国立は幾らでもと、今、渡邊先生のところもすごいいろいろなことをやってらっしゃる。

【吉田委員】 美術館、博物館なんかと一緒にです。

【渡邊委員】 じゃなくて、国立大学法人法できちんと決まっている。営利事業を営むことはできないんですよ。結果として余りが出たというのは問題ないんだけど、営利事業はだめなんです。原価設定をうまくやって、それで、なぜか知らないけど常にお金が入ってくるというようにしないとだめなんです。

もう一つの方法は、第三セクターをかませることです。寄附という形でもらう分には幾らでもできるので、卒業生とか誰かにやらせて、NPOでも何でもいいからやらせて……。

【吉田委員】 支援の何とか、芸大アシスト……。

【渡邊委員】 何とか理屈をつけて、そこでしっかりお金もうけをさせて、上がりは全部我々がいただくみたいに、そういうふうにはしないとだめです。

【吉田委員】 先ほどのコンサートの出前も、お金を取ってマネジメントして、そのお金をまた活動にやれたらと僕は思ったんですけど。

【渡邊委員】 それは、実際には、現実には無理です。東京芸大の場合、130から150の依頼演奏があります。それをやっていってマネジメントを大学でやることは無理です。学生を基本的に出すので、そんなに高額なギャラは取れません。大体1人に1万とか2万ぐらいしかもらえないから。

【吉田委員】 交通費分ぐらいで。

【渡邊委員】 だから、それは当然向こうのほうが、我々は単なる中つなぎするだけで、演奏したらそこで現場でお金が学生に行くと。

【磯見学長】 学生に行くということですね。

【吉田委員】 そういうことですか。アルバイトじゃないですけど、失礼ですけど。

【戸山音楽学部長】 そうすると、仲介は東京芸大の中のどういった部署がやっているんですか。

【渡邊委員】 演奏の場合は演奏企画室というところがやって、その職員が1人、2人でやります。仲介業をして、あとは音楽学部の芸術活動推進委員会というところで基本

的にオーソライズしてやると。ずっとやってきているのでそれなりに動いていますけれども、申し込みはちゃんとフォーマットがあるので、そこに書いて出してくれということで。

【戸山音楽学部長】 それは我々も、演奏企画室って残念ながらないですけども、一応ある。

【吉田委員】 済みません、余計なことを、事情を知らずに。

【渡邊委員】 ただ、法人化して、やっぱりある程度自由になったことは間違いないので、それで何かの仕組みをつくっていかなきゃいけないということと言えると思うんですよ。僕はいつも大学の中では法人法があるからだめだと言うほうなんですけれども、でも、それはやっぱり何か考えていかないといけないと思うんです。

【吉田委員】 何か予算がつかなくなってくるとどんどん苦しくなるので、どこかで稼がないといけない。

【馬場議長】 一般的にわたってかなりいろんなご意見をいただいておりますけれども、私も皆様のご発言のことを踏まえてといいますか、いろいろ共感するところも多々ありまして、ちょっと細かいところも少しお聞きしたいところがあります。例えば、最初のオペラ公演なんかの観客数も次第に増加しているというんですけれども、大体これはどのくらいの集客をされているんですか。

【戸山音楽学部長】 実は、2カ所でやっているんですが、1カ所はこの長久手市にあるホールでやっています。そこは実は、舞台を大きく使うと客席が500くらいしかとれないですね。ですから、この2公演に関しては毎回全てソールドアウトです。最初は、長久手も1回公演だったんですが、とにかくお客さんが入り切らないということで、数年前に2回に増やしました。これをごらんになった方が、実は前理事長なんですけれども、良い公演なので長久手以外にも持っていきたいと。こういう狭いところだけじゃなくて、できるだけ愛知県下の違うホールでもってやっていききたいと。そうすると、会場は市民会館的なホールがやっぱり多いんですが、客席数は1,000ぐらいですね。それもこれまでのところ、一応チケットに関しては毎回ソールドアウトしています。そういう状況です。

【渡邊委員】 オペラは非常に人気があるんですよ。普通に行くとなすごく高いので。

【馬場議長】 そうですね。普通ではなかなか。

【戸山音楽学部長】 おそらく本学の演奏会の中でも、そういったチケットを売ったりすることで心配しなくていいのはオペラだけだと思います。ほかは、オーケストラも入りますけれども、各専攻コースがやっている演奏会というのはなかなか、あるいは大学の定

期演奏会にしてもお客様に来ていただけないことが多いですね。最近ちょっと学生自体が聞きに来なくなってきていますよね。

【渡邊委員】 それはどこでもそうですね。今の学生は、最近じゃないんです。もう15年、20年ぐらい前から、学生が音楽会を聞きに行かなくなっています。

【戸山音楽学部長】 自分たちの先輩とか友人が演奏する演奏会に行かないんですよ。

【渡邊委員】 あるいは、著名な演奏家が来てもなかなか行かなかったりします。料金が高いということはあるんですけど、外部の場合には。人の演奏に興味を持つということがどうも少なくなってきましたね。

【戸山音楽学部長】 やっぱりそうですか。

【吉田委員】 それは美術でもあります。せめて見ることから始まると言いたくなるんですけど。

【渡邊委員】 個人的な感想では、やっぱり前はCD、今はiPodとか、あるいはユーチューブとか、ああいうところで満足しちゃうんですよ。ですから、ある演奏会に行つて、これはうちの学生ではないんですけども、どうだったと聞いて、よかったと。何がよかったと言ったら、CDと同じ音がしてよかったと言うんです。もうどうしてやろうかと思いましたが。

【吉田委員】 それも美術で結構あるんです。学生じゃないですけど、それは一般の人ですけど、テレビとかハイビジョンとか図版で見たほうがはるかにきれいで、本物を見たら暗くてちっちゃいとか、そういうふうになっちゃう。

【渡邊委員】 でも、やっぱりこれは、この場の話ではないですけど、小さいときからの芸術教育の貧しさが明らかに原因の1つになっていると思うので、大学としてそれはどこまでかわれるかという問題はすごくあるんですが、やっぱりかかわっていかなくちゃいけないと思うんですよ。そういう意味で、今回のこの藤沢のああいう試みをどんどんやっていくことが大切じゃないかと。そこに例えば院生とか若い卒業生、30ごろなんてみんな、ぴーぴーしてて食えないわけだから、少しでもそういうところを使ってあげるということは、彼らにとってもすごくいいことじゃないかなと思うんですよ。

【馬場議長】 それから、遠隔講義実績で岩倉総合高校という記載がありますが、どのような高校なんでしょうか。

【細川美術学部長】 愛知県のほうで指定というか、スーパーハイスクールという構想がありまして、そこでは非常にいろいろな実験的なことなんかも取り上げられてやられて

いる高校ということで、そこも1つの教育方法の中に、そういう光通信を使って双方向で教育を交換してやろうというようなことで、日本で初めてらしいです。

【磯見学長】 これの特徴は、映像を使ってやるんですけども、実技の授業なんですよ。鑑賞ではないんです。実際に向こうにその教員がいて、担当の美術の、ここの卒業生ですけども、担当の教員がいて、教室で学生たちがいて、そこでこちらからの課題を与え、実技をやらせて、その映像をまたこっちで確認するというような形で行ってまして、そこが一番大きな特徴です。

【渡邊委員】 そうすると、カメラを向けて、例えばA君がつくったのは、これは何かこういうところがああだこうだと言って。

【磯見学長】 その辺、アドバイスをして。

【細川美術学部長】 即それを講評したりとか、いろんなことがその場ですぐできるという。

【磯見学長】 実際に作品が出てきますと、かなり高度なものがあり、色彩の勉強とか結構充実したものが出てきますね。

【渡邊委員】 それはおもしろいね。

【馬場議長】 高校でも、美術課程だとかそれから音楽の課程を持っている高校がありますね。

【磯見学長】 特に岩倉総合高校は美術課程があるわけではないところです。

【馬場議長】 そうですね、ここは。

【長谷芸術情報センター長】 でも、岩倉は専任の先生なんですよ。今非常勤がすごく多いんですけど、岩倉は専任の先生がいらっしゃる。

【寺井芸術創造センター長】 それもここの卒業生なんですな。

【磯見学長】 そうすると、その中から本学を受験するという学生が出てくるんです。

【渡邊委員】 でも、芸術の専任教員がいるのはありがたいですね。

【馬場議長】 そうですね。だから、これから芸術大学を卒業して、みんな作家になったり演奏家になるわけではなくて、やっぱり周辺の例えば評論したりそういったことに携わったり、あとマネジメントに携わったり、いろんな人たちが当然出てくるわけですけども、特に、そういう芸術領域のリテラシーという問題に関心を持つような学生たちもやっぱり育てるということが非常に芸術大学として重要だと思うんですけど。

【磯見学長】 僕は、どちらかというと専門家になる人よりも、その周辺に、ならない

人というのが重要じゃないかなと思っているんです。その人たちが社会に芸術家というようなものを浸透させていくもとなっていくんじゃないかなと思います。

【馬場議長】 それから、私も評価したいのは、この大学は非常に模写だとか修復に大変力を入れておられて、それは非常に重要なことだと思いますし、アメリカのボストン美術館の修復部というのはすごい施設がありまして、ほんとうにやっぱり修復という仕事の重要性を感じます。修復は科学技術と非常にまた密接な関係もあって、ボストン美術館に行きますと、走査電子顕微鏡だとか化学分析の機器だとか、そういうデパートメントが大学と同じぐらいの施設があったりします。これは東京芸大も結構充実していて、うちの学芸員も、東京芸大の大学院を卒業した修復関係の職員も今おります。

【渡邊委員】 ありがとうございます。文化財保存学というのがうちの大学院の独立専攻につくられ、ご存じだと思うんですけども、あそこに結構科研費とかほかのお金が入ってくるんですよ。だから、それは結構使えるかなと思います。数十万単位じゃないです。やっぱり数百万単位のお金が入ってくる。あと、仏像の修復とか壁画の修復とか、それも受託事業ということでそれなりのものが入る。もちろん汗もかかなくはいけないわけですけども、ピアノで何だかんだというよりよっぽどお金が入ってくるので、残念ながら。悔しいなと思うんです。

【馬場議長】 そうですね。ぜひこれからもちょっと力を入れて続けてやっていただきたいというように思っています。

【吉田委員】 そうですね。名古屋城のほうもこちらがやられていますのでね。あれだけ……。

【馬場議長】 そうですね。名古屋城のふすまの障壁画の模写、修復もこちらでいろいろご担当いただいています。うちも名古屋城の障壁画の模写、修復の展覧会をさせていただいたのですが、非常にすごい仕事をしておられるということがよくわかりました。

【渡邊委員】 そういう情報をもっともっと宣伝する。

【吉田委員】 あるかもしれないですね。

【渡邊委員】 それをしていくと、やっぱり愛知芸大ってこういうことをやっているんだということがわかっていい。実は、東京芸大にしてもまだまだ宣伝力が低くて、まだ十分ではないんですけども、特に附属の高校がありますから、そういえば附属高校ってあるんですかみたいな話がまだあるんですよ。どういうことをやっているのかということで、数年前から何か説明会をまともにやるようになってから、ものすごく一応説明会には来て

くださるので。

さっき、受験生確保という話がちょっとありましたけれども、さすがに音楽のほうでは、ピアノとかバイオリンとか演奏系のほうでは作曲も含めてやらないんですけれども、学科系のほうは今学校説明会、これはもう五、六年やっているのかな。一旦音楽学楽理がどんと減って、これは定員割れかと思ったんですけど、説明会をやったら次の年はすごく持ち直して、今またちょっとこうなっているんで、あれは効果はあるなと思います。

美術のほうも実は受験生がどんどん減っています。それで、毎年大体6%前後かな、正確にはちょっと覚えていないんですけれども、5、6%減っているんですよ。そうすると、入学検定料が毎年数百万ずつ減っていくということになるので、せこい話なんですけど、それはやっぱり大変だということで、まだ実行はしていないんですが、美術学部のほうでどういうふうな展開をするか考えるという話になってきています。

【長谷芸術情報センター長】 いろいろ問い合わせを受けていますよ、美術のほうからね。うちのデザインは横ばいというか、そんなに落ちていないものですから、何で愛知芸大は落ちないのか、どういうことをやっているんだという話はいろいろ聞かれます。それで、僕のほうもこういうことをやっていますよと話をします。そんなことまでやるのみたいなことを大分言われているんですけど、うちの場合は高校から要請があったら授業をやりますよとか、説明会に行きますよと。もう全部オープンになっているので、先生方も結構大変なんですけれども、それをやり過ぎると、それは愛知の特徴でもあるんですけども、名古屋造形大学とか名古屋芸術大学の先生とよく会うんですが、「愛知芸大はあんまりやらないでくれ」と言われる。

【渡邊委員】 俺のところ、とってくれるなというやつね。それはありますね。

【長谷芸術情報センター長】 はい。そんなこともちょっとあるので、でも、これから少子化はもう確実にあるので、もっと積極的にやっていかなきゃいけないかなというふうに思っているんですけどね。

【戸山音楽学部長】 音楽のほうも受験生に関しては、全体では横ばいなんですけど、中を見ると特に声楽は減りましたね。

【渡邊委員】 声楽は減りました？

【戸山音楽学部長】 管打はすごいんです。今、やっぱりブームですよ、きっと。どういうわけか、ウインドオーケストラとか高校とか。でも、合唱界を見ると非常に盛んですけど、やっぱりそういうのから声楽の世界に進んでいこうという人数は、おそらく

東京芸大も減っていると思います。

【磯見学長】 男の人が少ないですね。

【戸山音楽学部長】 それはもう昔からあったことです。

【馬場議長】 全部の芸大の今特徴で、女の人がすごい多い。

【戸山音楽学部長】 どうせ行くんだったらあそこを目指そうということになりますから。

【馬場議長】 それから、音楽学部のことはあんまり私も十分な知識がないんですけど、東京芸大は邦楽がありますね。愛知芸大は邦楽はないですね。

【磯見学長】 ないですね。

【馬場議長】 だから、北爪先生、こういった芸術大学の、特に音楽関係の大学の邦楽に対するスタンスというのはどんなふうに今考えたらよろしいのか、ちょっと私もそのあたりがよくわからない。

【北爪委員】 実際に、だから、横並びでその中に日本音楽があってもほんとうはおかしくないんですけど、成り立ち方が西洋音楽ベースで全部できちゃっているわけですから、そこへねじ込むというのが難しいですよ。だから、新しくそういうところをつくってつぶれたところもありますけど、本来おかしな話なんですよ。

ただ、この場合は美術もありますから、美術と一緒に、美術のほうには日本画があって、実際に前に僕がここにいるときも、みんなでわーっとやっていた時期はあったんですよ。ただ、そうすると、どなたに来ていただくかとか、現実問題になったときにややこしい話で実務的に無理ですね。

【戸山音楽学部長】 どうしても流派の問題ですからね、邦楽というのは。

【馬場議長】 流派の問題はいろいろありますね。

【渡邊委員】 ありますよ。

【戸山音楽学部長】 ありますよね。

【渡邊委員】 ただ、東京の場合は、もともとあったのが一旦もうこれをやめちゃえという話になったんですよ。邦楽科をつぶして邦楽研究所みたいにすればいいじゃないかというのが新制大学移行時にあって、それで、やっぱりそれはよくないということで何とか持ち直して来ているという歴史があるので。

確かに、邦楽は教え方が、やっぱり流派の問題とか、やっぱり基本的に口伝えの世界、家元の世界ですから、洋楽のほうのようにもう少しシステムティックに合理的にやるとい

うのは合わないという面もちろんあるんですよ。大学の教員なのか、家元でお師匠さんなのかという問題があったりするんです。

【北爪委員】 京都市立は研究所の組織で別建てにして、校内で行き来しているんですよ。ああいう方法のほうが可能性があるんじゃないですかね。

【磯見学長】 東京芸大の邦楽には外国の留学生は入っていますか？

【渡邊委員】 入っています。来ています。尺八とかあります。そう多くはありませんけれども。

【磯見学長】 どうしても音楽はヨーロッパにこっちから行くばかりで、向こうから留学生は来ないですよ。

【渡邊委員】 最近、東京の場合は、なぜかわからないけど、アメリカ、ヨーロッパの留学生もしばしばいるんです。それも指揮とか作曲とか、今まではほんとうに音楽学とか邦楽が中心だったんですけれども、いわゆる西洋音楽系のところにも来るようになって、人数はやっぱり少ないですけれども。聞いてみたら、特に何か日本に特別な縁があったというわけでもないんですよ。やっぱり興味を持ってきてくれると。

【磯見学長】 交換留学というんだけど、交換になかなかならない。

【戸山音楽学部長】 実はリスト音楽院から、結局音楽学ですけども、交換留学で来たいということがあります。

【渡邊委員】 民族音楽系選択は、おそらくね。

【戸山音楽学部長】 そうです。ただ、うちの大学の音楽学は専門が中国とロシア、あとフランスです。民俗音楽じゃないですけど。

【渡邊委員】 いわゆる日本音楽の研究者はいない？

【戸山音楽学部長】 先生はいらっしゃらないです。うちは指揮科はないですけども、どうしてもやっぱり作曲とか音楽学であって、実技のプレーヤーでなかなかヨーロッパからこっちに来たいというのは考えにくいですね。

【北爪委員】 作曲はいますね。文科省の給費で何か国立に2人ぐらいいましたね、僕が行ってから。ただ、大震災で里帰りして、新しい学期にメールが来て、両親がおどされてというので1人退学しちゃいましたけど。

【戸山音楽学部長】 いつとき、東京芸大に僕がいたころ、その直後だったと思いますけど、中国から大学院オペラ科にたくさん入ってきましたよね。

【渡邊委員】 今でも多いですね。

【戸山音楽学部長】 やっぱ多いですか。

【渡邊委員】 中国、韓国、特に声楽は中国が多いですね。

【戸山音楽学部長】 そういったときの修士課程における入試のやり方というのは、例えば学科はどうなっているんですか。

【渡邊委員】 修士から入ってくる子たちについて言うと、外国人枠の入試が別にあるんですよ、それは実技優先で採っています。学部生が普通に大学を受けるときには9月に入試で、外国人は2月に入試です。

【戸山音楽学部長】 それは枠を設けているんじゃなくて、別に入試をやっていると。

【渡邊委員】 そうです。若干名。

【戸山音楽学部長】 学科系に対しては不問にしているというのですね。

【渡邊委員】 学科系は一応、厳しい試験があるわけではないので、口述試問である程度はしゃべれないとももちろん困るんですけど、日本人と同じようなことはさせないです。

【戸山音楽学部長】 それは修士の定員の枠の中でやっているわけですね、今現在。

【渡邊委員】 定員の枠なんですけど、もちろん定員オーバーすることはできるので、実際には。

【戸山音楽学部長】 でも、別にそれは外国人枠というわけではないということ。

【渡邊委員】 大学の中では外国人枠と言っています。要するに、入試は別枠でしているので。だから、声楽の大学院修士課程在学学生定員何人、在学学生何人、在学学生のところの内数で外国人が入っていると、そういう書き方です。定員としていわゆる届け出を出している別枠ではないです。その辺、融通をどんどんきかせちゃえばいいですね。

【北爪委員】 愛知県芸で博士課程の学位を取った方が外国人で2人いらっしゃいましたけど、それは入るときはどのような形で入ってきたんですか。それから、学位の取得というのは当然論文ですよ。論文は英語ですか。

【長谷芸術情報センター長】 日本語です。うちの学生よりは数段いいですよ。すごい論文を書きましたよ。2人とも全部修士から来ていますから。

【渡邊委員】 日本語、すごいですよ、外国人の博士ぐらいになると。この間スピーチをさせたら、学長が俺よりうまいじゃないかって。

【長谷芸術情報センター長】 宮田さんですか、個人名を言って。

【馬場議長】 やっぱ大学院に来る人は、中国や韓国あたりから受験してくると。

【長谷芸術情報センター長】 そうです。多いです。

【馬場議長】 なるほど。大体修士のあたりからこっちに来られる。

【磯見学長】 そうですね。要するに、学部はなかなか入りにくいんです、外国の人が日本人と同じ試験をやりますから。

【渡邊委員】 学部時から入っている外国人留学生は、東京の場合は音楽環境創造科に時々います。その場合、センター試験は受けなくて、外国人は日本語能力試験がありますのでそれを受けて、あとは中の個別入試に関してはちゃんと日本語でやりとりして、それから小論文とかそういうものも全部日本語で書くという形です。かなりハードルが高いですよ。

【戸山音楽学部長】 先程の社会人の話なんですけど、音楽は我々は基本的にはマンツーマンなので、社会人をどういう形で受け入れるにしても、どうしても限りがありますよね。一緒に一同に集めて授業することができないんですけど、でも、おそらく、先ほど団塊の世代という話に出てきたんですけども、既にいろんな音楽大学で勉強して、今は音楽から離れてしまったけれども、もう一遍勉強してみたい、あるいはこつこつと少しずつだけれども継続してやってきて、ある程度の年齢になって、40、50歳ぐらいになって、もう一度学び直してみたいというニーズってきっとかなりあると思うんですよ。

【渡邊委員】 あると思いますよ。

【戸山音楽学部長】 ちゃんとしたところでもう一度勉強したいというか、普通の街中の音楽学校だと満足できないということがきっとあると思うんですけど、そういうニーズは僕はかなりあるような気がするんですね。だから、それに大学がどう対応できるか、音楽はマンツーマン故、非常に難しいんですけどね。

【渡邊委員】 そのときに、大学としてやっぱり年間を通して授業を30回やらなきゃいけないとかそういうふうに考えなくて、ある種公開講座的な扱いをするということができないかと今ふと思っていたんですけどね。

【戸山音楽学部長】 かなりありますよね。やっぱり学生たちが勉強するのと、我々みたいにもろいろ経験を積んで、そこでもう一遍勉強し直したいというのは、求めるものが全く違うので。やっぱり学び直すってすごい楽しいことなんですよ。

【吉田委員】 社会人がやるって、すごい真面目に聞いて、真面目にやりますから。申しわけないけど、学生さんは時々、まあ、いいや、雨が降ったから今日はやめようとかというのがありますけど。

【渡邊委員】 さっきの吉田さんの話にかかわる暴論ですけど、毎週土日で、高校であ

れりカレントであれ10時間ずつレッスンする。そのかわり先生は無料奉仕になっちゃうんですけど、1人1万円取ったら何百万という金がもうかっちゃうわけですよ。その場合、授業料としていたか何といったかそこら辺はちょっと難しくて、多分やったら文科省が、財務省が文句を言うだろうと思うんですけど、でも、そのくらいの発想は法人化になって出てきてもいいのかなという気は。実際、3代前の事務局長がそれを言い出したんですよ。

【長谷芸術情報センター長】 その内容は、僕も法人化の前に、文科省にそういうことができないだろうかといって、一回お話を伺いに行ったんですね。そういったときには、それは専門職大学院に当たるということで、専門職大学院は各県に1校だと言うわけですよ。それで、そのときに愛知県は愛知教育大学がもう手を挙げていたんですね。ですから、愛知芸大はやっても無駄ですよと言われたんですけども、その辺も少しずつやっぱり考えていただいて展開できたらなというふうに思いますけどね。

【渡邊委員】 それと、専門職大学院までしちゃうと、また面倒くさいことがいろいろあるはずなんですよ。もう少し自由にやりたいですよ。

【長谷芸術情報センター長】 先生おっしゃるように、単位だけ取れるとか、何かそういう仕組みができるともつといいと思いますね。

【北爪委員】 ディプロマコースとか、科目等履修生とか、この科目だけ毎週、例えば寺井先生のレッスンを1日受けに来るだけで毎週来ていると、その単価で計算されて、そういうシステムはないですか、まだ。

【長谷芸術情報センター長】 科目等履修はできますけど、履修しただけで別に大学卒とかそういうふうにはならないので。

【北爪委員】 書類化されないんですよ。単位をもらえるというだけの話で。

【寺井芸術創造センター長】 ただ、ほとんどがクラス授業ですね。ですから、個人レッスンではそういうことはあり得ないですね、今。

【渡邊委員】 それと、個人レッスンだと、あんまり人数が増えちゃうと教員のほうの負担も増えてしまうので、平日はできないから土日といっても、土日はまた演奏活動するとか、いろいろある。

【北爪委員】 それをちょっとゼミにするとかさ。

【渡邊委員】 そうだね。少し効率よくやる。

【北爪委員】 1こまに3人とかね。

【磯見学長】 何の資格もない研究生の制度をもうちょっとうまく利用したらいいかな

という気がするんですけどね。

【渡邊委員】 研究生、あれは多分何かで決まっているんでしょうね、おそらく。省令とか何か、僕は調べたことがないですけど。

【吉田委員】 早急に改革してほしいですよ。大学、許認可をどうのこうのと言っているよりも。

【北爪委員】 でも、実際どうなんでしょうね。大学、愛知県芸の場合は技術を教えるだけじゃないと僕は知っていますが、表から見たら技術を教えるところだろうと思いますよね、芸大系というのはね。でも、人間を育てることですよ、一番大事なのはね。それをどういうふうに応用して、大人も人間がちょっとできてからやるとまた育つよみたいなね。文化貢献というのは、やっぱり長い目で見るとそれが一番大事ですよ。そこがだから難しいんですよ。

ただ、渡邊先生がおっしゃるように、技術のベースはアカデミックであるというのは間違いないわけだから、それがわかった上でというのは、やっぱり無意識に子供のときにそれがついちゃうか、かなり真面目な子か、僕ぐらいになってやっとわかるかぐらいのことですから、それをサポートする場所としてやっぱりいてほしいですよ。

【磯見学長】 だから、教養教育なんかはやらなくてもいい人が入ってくれると。

【北爪委員】 おもしろい意見が、教養教育は学部3、4年でやるべきだという意見もあるんです。1、2年で全然わかんねえよと。

【磯見学長】 それと、教養教育はやっぱり非常に力のある人がやらなきゃだめだということですね。

【渡邊委員】 教養教育に関しては、実は東京のほうでプログラム、芸術家にとっての教養って何だという答えを出さなきゃいけないんですよ。実際には今やっていることを再確認する形に近い物になると思いますけど。

【北爪委員】 そんな難しいことを書かせたって、読むほうもまたわからないんだから。

【渡邊委員】 ただ、限られた予算でも、今非常勤の数も減らさなきゃいけないという状況に陥っちゃっている中で、じゃ、一般の授業をやらなくていいかということ、そういうわけにもいかないの。どうですか、僕なんかの個人的な感想では、やっぱり自分にとって、何かこれが教養教育だとやられるよりも、いろんな分野に興味を持っているものを見た、聞いたということがすごく今の自分に役立っていると思うので、1年間、一つの授業をずーっと30時間も受ける必要は全くないと思うんですよ。そういう複合的なプロ

グラムをできたらいいかなと実は考えているんですけど。

【磯見学長】 やっぱそれは芸術大学にかなり重要なことだろうと思うんですね。

【馬場議長】 予定の時間が来てますけれども。

【吉田委員】 どうしても言いたかったのを1つだけ、済みません。

実は、いろいろ勝手なことを言いましたですけども、とにかくすごい、これを見せていただいて、大変だと思います。すごいやられているなという、これは最大限に僕は評価したいというふうに思います。批判だけで終わっちゃうと申しわけないので、せっかくこれだけやっていただいたので。それと、私どもの美術館も非常にお世話になって一緒にやらせていただいたりしているので、それに対してもほんとうに今後ともよろしく願いますということ、これだけは今日何とか言ってこなくちゃと思ひまして。

【馬場議長】 渡邊先生、何かよろしゅうございますか。

【渡邊委員】 ちょっと事務屋的な話になっちゃうんですけども、学校で事務の仕事ばかり最近やっていますので。この大学のパンフレットなんですけど、とてもいいんですけども、大学のホームページには入学定員で収容定員があって実数が書いてあるんですけど、パンフレットでは見えないんですよ、どこにも。例えば、定員にしてもどこかに一覧表か何かであるとわかりやすいかなとか。今、実際に在学生数は何人いるんだとかというのがぱっと見るといいかなと思ったりしました。

【鈴木事務部門長】 入試情報が71ページにあります。そこに入試関係。

【渡邊委員】 だけど、入試情報というのはその年の入試情報しかないじゃないですか。だから、4年間で今何人いるのかとか、現実に今愛知芸大には何人いるんだというのがここにどこか見るといいかなと。

それから、ホームページのほうですけど、これから教育情報の充実が求められて、うちもちょっとこれから考えなきゃいけないんですけど、例えば退学者の数とかって出さなきゃいけないんですよ、ほんとうは。まだちょっとこれは東京でも対応し切れていないので、これから出てくると思うので、早目に手を打たれたほうがいいかもしれないです。

【磯見学長】 これは公大協の情報システムで、統一してやろうということね。

【渡邊委員】 中教審がいろいろうさく言い始めているので。済みません。事務屋的な話で申しわけありません。

【馬場議長】 よろしゅうございましょうか。

【北爪委員】 もう十分です。

【馬場議長】 ありがとうございます。これから多分予算のほうもかなり厳しくなつて来ると思いますが、これまでほんとうにいろんなお仕事をされたということがこの資料からもうかがわれます。今後とも非常に厳しい予算の中で大変だと思いますけれども、こういったレベルを落とさないようにどうぞ頑張ってくださいというふうに思っています。

委員の先生方、ご協力いただきまして、ほんとうにありがとうございました。今日の議論をいろいろ踏まえて、また整理をしていただいて芸術活動に反映していただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。どうもありがとうございました。どうもご苦労さまでした。

【磯見学長】 どうもほんとうに今日はありがとうございました。

大変有意義なご意見をいただいて、これからの大学の運営に反映させていきたいと思っております。なかなか実際にはできないこともあるでしょうが、大変に有意義でした。ほんとうにどうもありがとうございました。

【岡本学務部長】 どうもありがとうございました。

これをもちまして本年度の愛知県立芸術大学外部評価会議を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

— 了 —